

エーアールファクトリー 有限会社

ハイブリッド印刷を発展させ、 ワンストップサービスの差別化を実現

事業内容

組立業からの転換

昭和48年に同社の前身である「新井製作所」が創業。主に家電製品の組立を手がけていた。上工程の別の企業で頻発していた部品の印刷トラブルに対応すべく、平成5年に部品の組立と印刷の同時提供を開始した。それと同時に「エーアールファクトリー」に社名変更した。

他社ではできない印刷を

社名変更後は携帯電話やデジタルカメラへの印刷を提供してきた。しかし、高感度のカメラ付きスマートフォンの普及や家電メーカーの海外進出の影響で受注が約50%減少した。そのため、同社は経営方針を180度転換。他社が不可能と断った難易度の高い試作・印刷の受注を狙うため、「1個を最短1日」をキャッチフレーズとし、ホームページをリニューアル。印刷技術の向上を全社一丸となって取り組んだ。「方針転換直後の2年間は失敗続きだったが、そこで培ったノウハウがあるからこそ今がある」と新井淳一郎社長は話す。

エーアールファクトリー 有限会社

代表取締役 新井 淳一郎

〒581-0053 大阪府八尾市竹濑東4-82

TEL. 06-6707-3416 FAX. 06-6707-4116

資本金/3,000千円 従業員/12名

主な取引先/ノベルティ、文具、日用雑貨など、
あらゆる分野

主力製品/完成品への直接印刷や球体の印刷

短納期 OK 企画力 OK 小ロット OK オンライン受発 OK 量産 OK 試作 OK 連携力 OK

高品質のスクリーン印刷で 高付加価値化を実現します

代表取締役 新井 淳一郎

匠のアナログ印刷（シルク・パッド）にデジタル印刷を今回導入したことでお客様と製品の裾野が広がりました。貴社の高付加価値化に貢献します。



補助事業

デジタル設備の必要性を痛感

ユーザーの短納期に対する要求が日々強まるにつれて、同社が手がける印刷方法では対応できない課題があった。

同社が得意とするのはアナログ印刷の中でもシルク印刷とパッド印刷の2種類の印刷方法だ。ともに製版が必要となるため、①小ロット、②多色刷り、③短納期の要求に対しコスト面から応える事が困難になってきた。こうしたニーズに応えるにはデジタル設備が必要。保有していない同社にとっては導入が急務であった。デジタル設備がないため断る仕事案件が増加、同社の売り上げ増加も阻んでいた。

印刷サービス充実のために設備を導入

そこで補助事業ではデジタル印刷への対応としてUV硬化フラットインクジェットプリンタを導入した。アナログ印刷とデジタル印刷の短所を補いつつ長所を組み合わせることで、付加価値の高い製品の提供に加え、ワンストップサービスによる差別化を可能とした。



導入したインクジェットプリンタ



優勝記念のサッカーボール



繊細な印刷技術にも対応

具体的成果

ハイブリッド印刷が実現し サービスの幅が広がる

導入したインクジェットプリンタを活用して、ロゴ入りのサッカーボールと犬の散歩用のウンチ袋の試作に取り組んだ。

サッカーボールについては「優勝」など単色の決まった文言にはアナログ印刷を用い、チームのロゴなど異なる文字などにはデジタル印刷を活用し試作した。5つのサッカークラブに提供したところ「トロフィーよりボールの方がうれしい」や「試合の内容が思い出せる」などの声が相次いだ。

全国高校サッカー選手権の舞台で

球体に直接印刷できる技術は評価を高め、平成29年1月に第95回全国高校サッカー選手権で優勝した青森山田高校からも記念ボールの印刷を受注。記念ボール30個を2週間で納め、同校の優勝に花を添えた。

ウンチ袋についてもアナログとデジタルを併用した。既存のアナログ設備で袋の表面に犬のイラストを印刷。デジタル設備では同社が開発した消臭機能のあるインキを使用し、動物病院の広告を印刷した。アンケートでは飼い主からの評価は高かった。「飼い主のマナーに対する理解が広まれば普及すると思う」と新井社長は期待を込める。

今後の戦略

取引先の業種が大幅に拡大

インクジェットプリンタの導入で、オンデマンド印刷が使用でき、素早い対応と小ロットの受注が可能となった。文具、玩具、小物、3D加飾などにも活用できることが判明した。家電中心であった取引先も現在では、文具、玩具、日用雑貨にまで波及。社数も10年前の平成19年頃に比べ3倍の約150社にまで拡大している。

デザイン力向上で 将来的な自社製品を目指す

今後については、同社内での企画・デザイン力の向上に取り組む考えだ。平成29年の9月から従業員2名をデザインソフトの「イラストレーター」の講座を受講させている。またデザインを学ぶ学生との産学連携も始めた。企業と学生との接点を設けることでデザインに関する相互効果も狙う。

こうした取り組みを進めていき企画力を向上させることで製品に対するデザインの提案や印刷方法を印刷業者の視点からアドバイスしていきたいとしている。その延長線上に「将来的には自社製品の開発にも着手していきたい」と新井社長は話す。

取材を終えて

無限の可能性を 秘めている会社

補助事業を活用して導入したインクジェットプリンタは同社の可能性を大きく広げることは間違いないだろう。実際、取材中でも新井社長は電話の対応や近辺の業者の訪問対応に追われていた。ほとんどが試作関連で分野もさまざまだった。これからは自社でのデザイン力を高め、将来的な自社製品を検討中。商品の製造元の箇所に「エーアールファクトリー」と印字された商品が近い将来、雑貨店などで手にできることもそう遠くはないはずだ。

<http://www.ar-f.co.jp/>